

児童の実態に合わせて

今でも鮮明に覚えている授業場面があります。教員になり10年を過ぎた頃のことです。

当時、養護学校小学部2年生を担当しており、担任業務も分掌業務にも、どうにか見通しをもって取り組むことができるようになっていました。

ある時、算数の「3」までの数概念について取り上げた授業で、十分な実態把握と入念な教材準備をして授業に臨んだつもりでしたが、なかなか思うように進みません。「なぜ、できないのか。」「せっかく作った教材だから……。」と、だめ押しして繰り返し言葉掛けをしていたように思います。

そこへ、廊下を通りかかったある先輩の先生が、教室を覗いて気になったのでしょうか、中へ入ってこられて、「代わろうか。」と言うやいなや、私が作った教材をはさみで切って提示し、難なく課題を解決されたのです。まるで手品のようなものでした。

その後、どのような意図だったのかを説明していただきましたが、私がそこで学んだのは、指導者の都合に合わせた授業をしないということです。瞬時に児童の理解度を図り、それに応じて教材もその場で変えていくこと、実態把握と教材研究は授業中も継続しなければならないこと、つまり、児童に歩みよる授業をするということです。柔軟に対応することの大切さを、この時に痛感しました。

それからは、授業には必ず、白紙・付箋・シール・はさみ・マジックを持参するようにしました。